

# バンディングかわら版（第9号）

鳥類標識調査（バンディング）で得られた成果をお知らせするニュースレター

## 鳥類標識調査（バンディング）とは？

番号入りの足環（標識）をつけた野鳥を放鳥し、のちに同じ鳥が再発見（回収）されることで、各個体の移動を調べ、その生態を明らかにする調査です。

世界各国で行われており、最も歴史の長い自然環境調査の一つです。日本では1924年に開始されました。現在は環境省が山階鳥類研究所に委託し、多数のボランティア鳥類標識調査員（バンダー）の協力により実施されています。



野鳥につける足環。足環をつけることを「標識」する、その個体が再発見されることを「回収」と言います。

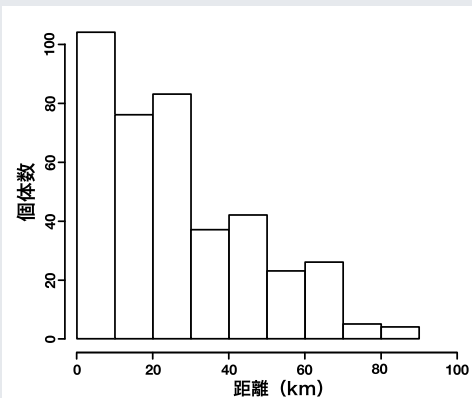
注）この調査は、野鳥を捕獲するための法的な許可（鳥獣捕獲許可）を受け、実施されています。

## 標識調査からどんなことがわかるの？

### カモ類4種混合による群れの移動距離を試算しました

カモ類は鳥インフルエンザのキャリアです。同じ池の中にはマガモやオナガガモといった様々な種のカモが同所的に生息します。同じ水域にいと互いに感染し、それぞれの種がウイルスを運ぶ可能性があります。

つまり、鳥インフルエンザの拡散を考える際には、特定の種のカモのみに着目するのではなく、移動距離が異なる種同士が集まった一つの群れとして考える必要が生じます。



カモ類4種混合の群れの移動距離と個体数の関係のパターン



（写真：渡り鳥アトラスより）

そこで、マガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、コガモという日本の冬鳥として代表的なカモ4種の混群を想定して、集団としての移動距離を検討しました。

関東圏での標識調査で得られた各種の移動距離データを用いて、これら4種の個体数が同じ比率の群れを想定して、シミュレーション解析を行いました。これより群れ全体としての推定移動距離を計算しました。

カモ類4種が同じ比率の個体数で構成される群れの移動距離は、距離と移動個体数がシミュレーションに比例するパターン（上図）を示すことが分かりました。4種からなるカモ集団は、数十kmの範囲に広がり、近距離ほど移動個体数が多いと試算され、ウイルス拡散の可能性も同様のパターンになると推定されます。

より詳しく知りたい方は令和5年度調査報告書 p.23-28の本調査結果をご覧ください。  
(<https://www.biodic.go.jp/banding/report.html>)

鳥類標識調査にご協力ください！バンダーになりたい方、足環のついた鳥を発見した方、いずれも右記までご連絡ください。

宛先：〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115  
山階鳥類研究所 鳥類標識センター  
電話 04-7182-1107 FAX 04-7182-4342  
E-mail: [BMRC@yamashina.or.jp](mailto:BMRC@yamashina.or.jp)

## どんな鳥に何羽くらい足環をつけているの？

2022年に足環をつけて放鳥された鳥の総数は287種128,153羽（前年より10,054羽減）でした。上位3種は、アオジ（26,344羽）、オオジュリン（16,498羽）、メジロ（7,919羽）です。1961年から2022年までの累計放鳥数は、504種、約651万羽（6,514,582羽）となりました。



## 国際的にも注目されている日本の鳥類アトラスWEB版

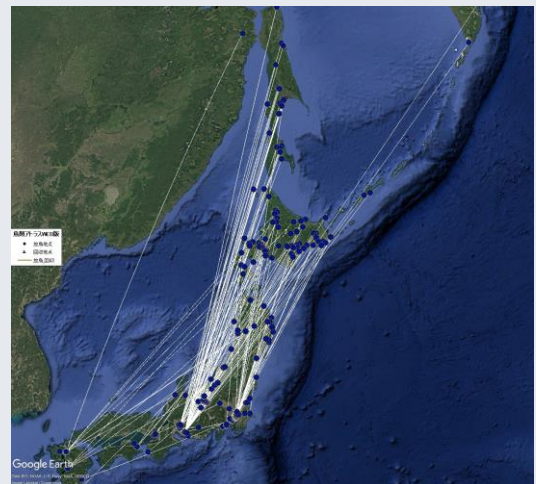
### 鳥類標識調査における移動回収例はウェブサイト上で一目瞭然

鳥類標識調査のメインデータの一つに、足環をつけた鳥がどこで放鳥され、どこで再発見（回収）されたのかという、移動回収データがあります。

環境省ウェブサイトには、過去数十年にわたる膨大な野鳥の移動回収データを地図上に表示するサービスがあります。これが「鳥類アトラスWeb-GIS」です。



環境省ウェブサイトの「鳥類アトラスWeb-GIS」ページ「鳥名（和名）から検索」のページ。移動回収データをダウンロードできる。<https://www.biodic.go.jp/birdRinging/index.html>



移動回収データのGoogle Earth表示例  
ハクセキレイのデータ

移動例を知りたい鳥の移動回収データについてどなたでもダウンロードできます。このデータはGoogle Earthアプリを用いて地図上に表示できます。

### 海外からも評価されている先進的な日本の試み

このサービスは標識調査データを誰もが手軽に閲覧できるようにと開発されましたが、国際的に見てとても意欲的なチャレンジなのです。標識調査が盛んな欧米諸国でも、これほど簡単に誰もが標識データを見ることはできません。数値や文章による発表しかなかったり、閲覧希望者がいくつかの手続きを経なければならない国が多い中で、日本では誰もが直感的に分かりやすい形で閲覧できるよう公開\*しているのです。

この試みは、2024年秋に開催された鳥類標識調査100周年記念シンポジウムにおいて、他国にはない先進的な試みだと海外の研究者から評価されています。

\*注) この「公開」データは、調査地や対象種の保護等の観点から、加工処理されています。どのように加工されているかの詳細は上記URLの説明をご覧ください。

標識調査の主要な成果や活用は、以下の環境省ホームページに掲載されています。より詳しく知りたい方は、以下のURLをご覧ください。

<https://www.biodic.go.jp/banding/utilization.html>